



## 建学の精神

自分のようにあなたの隣人を愛しなさい

イエス・キリストが自ら弟子たちの足を洗い手本を示されたように、行って同じようにすること、人と共にあり、共に生きることを人生の目的と喜びとすること、病人や障がいを持つ人、お年寄りの不安や苦痛、悲しみを理解し、クリストファーが危険を冒し、命がけでイエス・キリストを背負ってライン河を渡ったように、これらの人々を大事にケアする人材が聖隷学園から育つことを願っています。

また、聖隷学園は地域の人々にとって役に立つ学園であることを願っています。



聖隷学園 校章・マーク  
外側の二重円は、イエス・キリストが弟子たちの足を洗った「たらい」を表現。内側の三つの円は、医療（赤）、福祉（緑）、教育（青）を象徴。中央の十字架はキリスト教を示し、聖隷のすべての事業が、キリスト教会の中から始まったことを示しています。

## 学校法人 聖隷学園

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453

TEL : 053-436-5311 FAX : 053-436-5355



## 創立

聖隷学園は、1946年(昭和21)のちに初代院長となった長谷川保と浜松工業高校専門学校(現・静岡大学工学部)教授であった福原達三によって始められた(遠州基督学園)を前身とします。当初は、近隣の農村を訪ねて英語や数学、料理とともに聖書を教える巡回学校でした。

敗戦で心身ともに廃墟となった日本の再興は「青年の精神の復興にあり」と考えた長谷川は、同じ考えを持つ福原と「新しい国造りは新しい人創りから」の信念のもとに開学したのです。その教育は、台風がくれば気象学を、右利き左利きから遺伝学を、といったユニークなものでした。最初の入学者は4、5名でしたが、やがて全国各地のキリスト者の子弟が集まり、福原園長夫妻は校舎に住んで、学生たちと一つになって新しい校風を築いていきました。1949年(昭和24)各種学校の認可を受けて(聖隷学園)となり、長谷川は初代理事長に就任しています。

日本復興構想を現実のものとするために、長谷川は1946年(昭和21)戦後初の衆議院選挙に当選。以降、福祉の領域で活躍しました。1950年代に入ると看護婦不足の深刻化が社会問題に。当時、看護婦教育は、日本赤十字や公的病院の附属の学校で行なわれ、民間では聖路加国際病院だけがその役目を担っている状況でした。聖隷保養農園附属病院(当時)でも看護婦不足は同様で、長谷川は1952年(昭和27)2月から設立準備に入り、わずか2カ月で(聖隷准看護婦養成所)を開所。1959年(昭和34)(聖隷准看護学園)に名称を変更しています。1966年(昭和41)には衛生看護科を持つ高等学校(聖隷学園高等学校衛生看護科)が開学。その後、1974年(昭和49)普通科高等学校へと移行。一方、1969年(昭和44)看護婦養成校として(聖隷学園浜松衛生短期大学)を開学。2002年(平成14)社会福祉学部開設と同時に(聖隷クリストファー大学)と改称しています。2004年(平成16)には、リハビリテーション学部が開設され、現在は認定子ども園、中学から、大学院博士前期、後期課程を有する教育機関へと発展しています。



創立者 長谷川保(1903~1994年)  
「日本の復興は青年の精神の復興にあり」  
寝食を忘れ1週間、聖書を手に考え続けた結論でした。



## 創立の背景と歴史

創立者 長谷川保は、教育の専門家ではありませんでしたが、大正デモクラシーの気運が盛り上がる中、「海外に行って一旗揚げたい」という青雲の志を持って、1923年(大正12)に設立された日本力行会海外学校(当時の東京府上板橋村小竹)に入学しました。ちなみに日本力行会は、1897年(明治30)嶋貫兵太夫牧師によって創立され、海外移住の世話をする機関が少ない当時の日本で、苦学生及び渡米希望者に幾多の便宜を与えた団体です。

一方、浜松では、東京神学大学の創立者でもある植村正久牧師が、東京・横浜・熊本・札幌に次ぐキリスト教伝道の拠点として、1923年(大正12)日本基督教会濱松伝道所(のちに遠州栄光教会)を設立。関東大震災復興の手伝いを2カ月行なって、入隊のために帰郷した長谷川が、その門をくぐりました。長谷川は、日本力行会海外学校で聖書と出合っていたのです。

長谷川は、1926年(大正15)イースターの日に、濱松伝道所の人たちとともに「宗教と実践」のため、クリーニング店を営みながら社会活動を行なう組織(聖隷社)を始めました。聖隷という名は、弟子たちの足を自ら洗ったキリストの姿からきていて、牧師で社会活動家だった賀川豊彦による命名です。当時のイスラエルでは、人の足を洗うのは奴隷の仕事だったため、献身的な奉仕の心を表わす名としてつけられました。

1930年(昭5)聖隷社の仲間と支援者たちが創立した消費組合浜松同胞社に、一人の青年がやってきました。桑原青年は、当時、死の病として恐れられていた結核に感染していました。患者は、家族からも受け入れられず、住居を転々とすることもあり治療に専念することができない時代だったのです。聖隷社では、この青年を迎え入れたことをきっかけに、無償で重症の結核患者たちの世話を始めました。この愛の業が今日の聖隷グループの端緒となります。このような無私の奉仕と患者の関係を、雑誌『主婦之友』に賀川が紹介して掲載したため、さらに多くの結核患者が全国から殺到し、地域住民との関係は一層悪化してしまいました。

翌年、〈ベテルホーム〉と名づけた施設で事業を続けましたが、結核を恐れる地域住民の反対運動で、場所を転々としなければなりません。賀川は、1934年(昭和9)〈イエスの友会〉全国大会で、長谷川に話をする場を与えます。長谷川の訴えに共感した会衆は、その場で一坪25銭の献金(一坪献金運動)を始めました。ちなみにこのときに上映された映画「もの言う手」は、ドイツのディアコニッセ(看護などに奉仕する女性のキリスト教徒)の働きを紹介するものでした。長谷川はのちに、日本の看護精神を確立するために5名のディアコニッセと1名の宣教師を招聘しています。

〈一坪献金〉をもとに1937年(昭和12)三方原へ移転。〈聖隷保養農園〉と改称しました。迫害と嫌がらせはなおも続きましたが、1939年(昭和14)クリスマスに昭和天皇からの特別御下賜金があったことから、天皇が認めた働きだからということで、長く続いた迫害が止まりました。〈聖隷保養農園〉は、その後、診療所、総合病院、高齢者事業、保健など、多角的な経営を行なう福祉事業団へと発展しました。